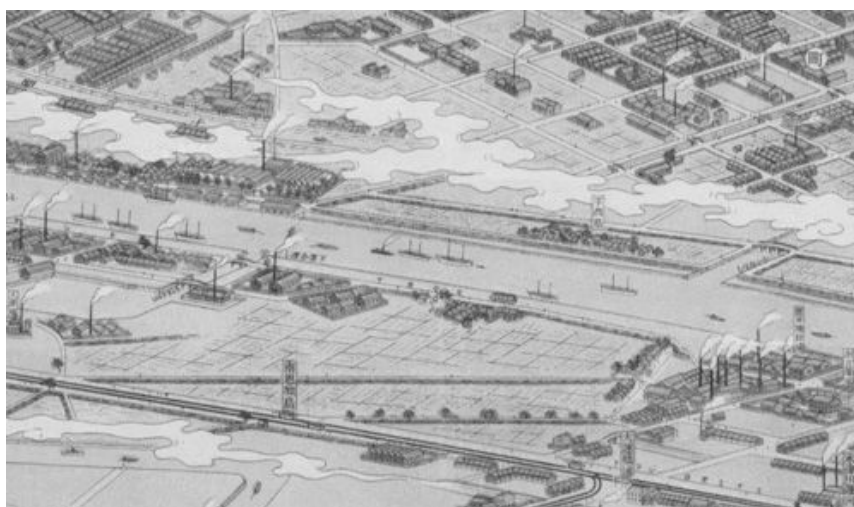


平尾新田は、千島新田の南にあり、もと木津川河口の寄州^{よりす}でした。宝暦 7 年(1757 年)、岡島嘉平次^{おかしまかへいじ}が新田開発の許可を受けましたが、その一部を大坂江戸堀(現西区)の平尾与左衛門^{ひらおよざえもん}が譲り受け、明和 8 年(1771 年)検地を受けました。天保 10 年(1839 年)発行の大坂湊口新田細見図^{おおさかみなとぐちしんでんさいけんず}によると、所有者は三軒家町の堺屋藤兵衛となっています。

木津川は江戸時代から諸国の回船が多く集まり「木津川二十四浜」と称せられ、川口港化しておりました。各浜では諸国の大船から二十石積の上荷船^{うえにぶね}等へ荷物を積み換え、市中の間屋へ運びました。二十四浜のうち大正区には、勘助島浜、三軒家浜、難波島浜、落合浜等があり、浜ごとに上荷船の所属は決まっておりました。木津川口の「川口湊^{さくらえ}」は交易で賑わう大坂の街にとっては不可欠なもので、大坂に入津する船から「石銭^{こくぜに}」を徴収し、「水尾湊^{みのおさらえ}」を度々行っていました。また、難破船救助の奨励を行っており、「シケ」の場合も高張提灯を掲げ、上荷船による救助を行えるよう手当等を与えておりました。

大正時代になると木津川沿いには水運至便の地という恵まれた条件をいかして造船所が集中し、大小合わせて 50 社を数えました。現在でも三軒家東から船町にかけての木津川沿いには鉄鋼関係などの企業が林立しています。



『大正区ホームページ』から転載

